Women's Action

あきた女性チャレンジ 事例発表会 報告書

＜起業＞のヒントはどこに？

と　き：平成18年 **1月22日(日)**
午後1時～午後3時
ところ：明徳館ビル **カレッジプラザ講堂**

「つどいの広場 ブランコ」 **佐々木 久美子**さん(能代市)

子育て家族を地域みんなで見守る街にしたい
～親子のいこいの場、相談の場、交流の場を～

ギャラリー「ココラボラトリー」 **笹尾 千草**さん(秋田市)

秋田で芸術作品にふれあうチャンスをふやしたい
～絵画、写真、演劇、音楽等表現活動の場を～

「華の豆会」 **山内 みどり**さん(秋田市雄和)

昔からの手作り豆腐を伝え、仲間と楽しく働ける場を
～地場産大豆にこだわった豆腐加工販売～

農家民宿「星雪館」 **門脇 富士美**さん(仙北市西木)

美しい星空と雪景色を見にきてほしい
～収穫体験ができ、田舎のジイチャン・バアチャンの
家に行った時のような気分にひたれる場を～

コーディネーター coordinator　国際教養大学 グローバルビジネス課程
助教授　**前中 ひろみ**さん

女性のチャレンジは　男性の元気、社会の活気！

女性のチャレンジを応援します！

主　催　　秋田県　　あきた女性チャレンジ支援連絡協議会

はじめに

■司会（藤田）
お待たせいたしました。ただいまからウィメンズアクション あきた女性チャレンジ発表会を開催いたします。

【司会者】
秋田商工会議所　藤田 真弓さん

私は、県が平成17年5月につくりました「あきた女性チャレンジ支援連絡協議会」の委員の一人として、この事例発表会の準備に携わってまいりました。

◆あいさつ　秋田県生活環境文化部次長　川上 正

最近は女性の活躍のニュースが多くなってまいりました。例えば女性の視点を活かした商品開発とか、女性が中心になって起業するといった事例が、特に秋田県では農産物の直売所や地産地消レストランの経営など、元気な女性の活躍が増えてきております。こういった場面は、みなさんが県内を歩くたびに目にする機会があると思いますし、マスコミも取り上げるケースが多くなってまいりました。そうはいいましても、人口の半分を占める女性の潜在能力というのは、まだまだたくさんあるのだろうと思います。それが社会の中で十分に活かされているかというと、まだまだじゃないかと思われているのではないでしょうか。私自身もそう思っております。

これから何か活動をはじめたいとか、思っていることを行動に移そうという場合に、必要な情報というのはたくさんあると思うのですが、そういった情報集めやこれまで経験した方々の経験談を聞きたいとか、そういった場合、十分な情報を得ることが難しいのではないかと思います。県では女性が働くとか、事業を新しくはじめる、あるいはボランティア活動や地域活動など、いろんな分野へチャレンジしたいと思った時にできるだけ応援していくという体制を作っていこうということで、関係する機関や商工関係者、いろいろな団体が集まりまして、昨年5月に「あきた女性チャレンジ支援連絡協議会」を作りました。この協議会では女性がチャレンジするために必要な、総合的な情報を提供する情報サイトを今年の2月に開設するということで、準備を進めております。

今日のこの事例発表会も、女性のチャレンジへの支援のひとつでありまして、先ほど司会からも紹介がありましたとおり、「ウィメンズアクション」と題しまして、現在活躍しておられる秋田の女性から、その活動についてお話しいただいて、これから何かをしたいと思っている方々が一歩踏み出していくきっかけになればいいなと思いまして開催した次第であります。

県内で活躍している女性は、たくさんいらっしゃるわけですけれども、今回は協議会のメンバーから推薦いただいた方に事例発表をお願いしました。活動の分野も住んでいらっしゃる地域も、年代層も違う方々、4人にお願いしております。今日参加された皆様が、事例発表を通じまして今後の活躍に役立てていただきたいと思っております。

知事はよく、女性が活発に活動しておられる地域は、非常に元気な地域が多いと、いろいろな場面で話します。実際に活動していれば、それはそれで元気な地域ということになりますし、何となく閉塞感のある社会の中で、女性ががんばるということは、男性に対する非常にいい刺激になるといいますか、そこでお互いパートナーシップを発揮することによりまして、女性も男性も元気になっていくということです。

県ではこれからも、いろんな場面で女性のチャレンジを応援してまいりたいと思いますので、今後女性の方々がますますご活躍されることを期待しまして、あいさつといたします。

事例発表

NPO法人
メリーゴーランド代表
（能代市）

能代市に平成17年5月につどいの広場「ぷらんこ」をオープン。子育て家族を地域みんなで見守る街にしたいと活動している。

佐々木 久美子さん

◆活動を始めたきっかけ

職場を離れてからつきあいがあった仲間と「ベビールーム　メリーゴーランド」をはじめたのが最初の一歩です。つどいの広場を立ち上げたのはそれからかなり後の話になります。今回は「起業」ということですので、立ち上げた頃からお話を進めたいと思います。

はじめたのは、平成11年10月4日月曜日、園児はたった1名でした。スタッフは4人用意しました。何とも心細いスタートでした。何でも立場に立ってみないと、状況などもわからないものなのですが、仕事を離れて自分が専業主婦という立場になったときに、自由がどんどん奪われていくということに、私自身がすごく不満を持ちました。それにいろいろなことが付随していって、不

満はどんどん大きくなっていくばかりで、仲間と会っては私のグチをこぼしたり、友達もグチをこぼしたりといった日々が続いたのです。こういう経験というのはきっと、いくらパーフェクトな主婦でもあると思います。この現実からちょっとは離れたいなという時が、今日ここにいらっしゃる方も一度は思ったことがあるとは思います。今は子育て支援が大変盛んになってきて、特別保育事業も随分充実してきました。そんな中で専業主婦でも、例えばリフレッシュするために、時間をちょっといただいて子どもを預けることができるのですが、たった7年前には、私は能代市出身ですが、能代市ではまだなかったのですね。美容院にも行けない、用事があるのに小さい子どもを連れて行かなければいけない。友達にグチもこぼしたい。自分がとても体調が悪いのに、子どもは連れて行けないから、ちょっと我慢をしようかなということで、熱が38度くらいあっても家でボーッとしていたりとか、子どもが邪魔なわけではないんですが、1～2時間時間をもらえれば、用事も早く済ますことができる、一度病院に行って、薬でももらえれば自分の体調も精神的な疲れもリフレッシュして、また前向きに進むことが可能なのに、多分それができないで困っている人が世の中にはたくさんいるんじゃないかということで、私たちは自分たちが保育士であったり、幼稚園教諭であったりという資格を活かして、その人たちのために何か役立つことがあるのではないかということで、話がどんどん大きくなっていって、思い切って「よし自分たちで保育園をつくっちゃおうか」ということになったんですね。話が持ち上がったのは、真夏の暑い盛りの7月で、10月の開設でした。

◆活動のための準備

私たちは開設にあたって、能代市にある山本福祉事務所を訪ねました。ここには私が幼稚園で働いていた時代に大変お世話になった先生が保育指導員というお仕事をされていたので、まっすぐそこにご相談に行って、設立にあたって必要な条件などいろいろお話を聞いたのですが、同時進行で資金調達、活動する場所さがしと私たちは動き出しました。何もないゼロからのスタートでした。主婦だったので自分のおこづかいもヘソクリも、みんなどこかに行ってしまっているので、ややもするとマイナススタートだったわけですから、市役所も商工会議所も銀行も、誰もお金を出してくれる人はいませんでした。「保育・福祉の仕事は金持ちの道楽みたいなものだから、近所に住んでいる金持ちのおじさんでも見つけて、その人にしがみつきなさい」ともいわれたんですね。私は長年保育の仕事にあたっていて、道楽なんて思ったことは一度もなかったので大変憤慨したわけです。仕事をまず進めていくにあたって、一生道楽をしないようにと心に誓ったのを覚えています。そんなこんなでなかなか前に進めなかったので、結局しびれをきらしたうちの夫が最後に出てきて、取引のある銀行にお願いをして250万円を銀行からお借りすることができました。このとき趣味を通じて知り合った人も随分助けてくれたらしく、夫が言った「ゴルフも仕事」は名言になりました。これはいまだに言われます。

◆現在の活動状況

設立の際、保育園というよりも気軽に使える託児所というものを私たちはイメージしていたのですけれど、保育指導員のお話では、「月々確実な運営資金が入ってくるような保育園という形でやっていってはどうか」と、「そうすると活動の継続も可能なんじゃないか」と。それはそうだなと、やはりいいものを作った限りは続けていきたいというのが私たちの中にもあったので、そうしますということで進めたのです。そのために課せられた「最低基準」というのがあって、保育園は認可外保育施設であっても、その基準を満たさなければ運営できないことになっています。私たちは現場にいたものとはいえ実際運営するにあたっては、何も知らなかったので、いいモノサシができたなということで大変役立ちました。ただ、それを守るための運営がとにかく大変で、それなりに整えないと許可が下りないんですね。入ってくる保育料の設定というのが、私たちにしてみれば高いほどありがたいわけです。でも利用してくれる人にしてみれば、いくらでも低い方が受け入れてくれるというギャップがありましたので、ラインを引くのに大変苦労をしました。ただ私も認可外保育施設の職員として仕事をしたことがあるのですが、子どもを見る以上、あまり保育のレベルは低くない方がいいんじゃないかと、できるだけ高い位置で、子どもたちの面倒を見れるような保育園にしませんかという目標を持っていたので、初志貫徹でそれだけは崩したくない思いがあって、保育料はかなり高く設定しました。今もそれはほとんど崩すことがないんですけれども、それでも利用してくださる方がいて、現在園児が50名、保育にあたるスタッフ、調理員すべて含めて14名で園の運営を行っています。これから「メリーゴーランド」を必要とする人たちのために、やはり安定した運営をしていかなければいけないということで、認可保育園の方向に進めていったらいいのか、今までどおり独自の保育を展開していけるものを保つべきか、大きな岐路に立たされているのは事実です。

今日、参加の方の中に、子育て支援分野ということに関心のある方もいらっしゃると思いますが、最近は、地域の活動が大変注目されていて、自宅で託児所を開いたり、看護師の資格のある方は自宅で病児保育を行ったりというケースもまれにあります。秋田でもあるとは思うのですが、子育て支援に限らず、コミュニティビジネスで自分の経験や特技を活かして展開していくビジネスなんですけれども、今大変注目はされています。県の方も地域のやる気を掘り起こそうと、とにかく一生懸命なの

で、やりたいなあと思う人は、ひとりでウズウズ考えているのではなくて、担当課をお訪ねになってはどうでしょうか。よきアドバイスがいただけると思います。今が本当にチャンスだと思います。私は、行政が一生懸命な時にかじりついていくのがいいんじゃないかなあと思います。

◆つどいの広場

「つどいの広場」は昨年からはじめました。「メリーゴーランド」を、地域との関わりを持ちながら、支援活動に発展させていきたいなということで、16年にＮＰＯ法人で新たに活動をはじめました。保育園の施設では活動の拡大にも限度が出てきます。やはり普段預かっているお子さんもいるわけですし、それなりの広さも必要になってくるのでなかなかできない、というのでインターネットでいろいろな情報収集をしていたときに、「親たちが立ち上げた親子の広場」という言葉が目に入ってきたわけです。何ですかこれはという感じで、私はそれに釘付けになったんですね。どんどん惹かれていきました。たまたま今日わたっている「女性のチャレンジを応援します」という冊子の中の31ページに載っていたんで、ぜひ後で目を通してほしいんですが、主婦がはじめた広場なんですね。何で私がそこに惹かれたかというと、一人で何かをやるのは大変なんです。私も仲間がいたのではじめられたというのがあるんです。それで、もし広場を作ったときに、広場を通じて子育て支援活動に地域を巻き込んでいくことはできないものかと、そこを利用した親子が育ち、次の世代も、また次の世代も自分たちで道を切り開いている力をつけていくことはできないものだろうかと、閉鎖的といわれる地に望みを託して開設したのは去年の５月のことです。ですからまだ１年は経っていないんですけれども。昨年たまたま山形のこの事業関連のセミナーでこの冊子に載っている奥山さんに会うことができたんですが、一本筋が通っているんです。本当にきゃしゃな方なんですけれども、もう頼りたくなるような本当に筋の通った立派な方だったんです。その方とそれぞれ大変なことがあって、乗り越えてきたことにお互いに共感ができて、「広場」というキーワードでつながったことがとてもうれしかったんですね。奥山さんも私がちょうど「メリーゴーランド」を立ち上げた時期に、自分たちで地域を何とかしていきたいということで「広場」事業に取り組んでたっていうことを知った時に、この人も同じように７年間がんばってきたんだというのが、私の支えになりました。

◆ネーミングについて

園名、施設名には様々な思いを託すと思うんですが、私も随分思いを託しています。「メリーゴーランド」には遊園地にあるメリーゴーランドの雰囲気を再現したいというのがあったんですが、華やかさというよりも、無邪気に遊ぶ子どもたちがいて、それを優しい眼差しで見つめている保護者の人たちがいる、私はその空間がとにかく大好きで、遊園地に行くとボーッとその様子を見ているんですが、そういう保育園にしたいなあというのと、「ぷらんこ」というのは支えてあげるというニュアンスがあるんです。子育て中の親子がたくさん集まってくるんですが、子育て支援に関わりたいという人も集まってきます。「ぷらんこ」に来る親子をそっと支えてあげることが、ひとつの目的であることと、親同士が支え合うことでみんなが育っていく、そんな場になればいいなあと思って「ぷらんこ」という名前にしました。

今自分の持つ力を発揮して輝いている女性がたくさんいます。昨年会った奥山さんもそうでしたが、いつかは自分もそういうふうにキラキラ輝いていたいなあと、何年かかってもそうなりたいなあと思っています。みなさんも自分が輝ける道を、ぜひ見つけてください。そして自分だけではなくて自分の周りにいる人たちも元気になるように、光をいっぱい放ってください。

ギャラリー「ココラボラトリー」主宰（秋田市）

秋田で芸術作品にふれ合うチャンスをふやしたいと秋田市に表現活動の場をオープンし活動している。

笹尾 千草さん

みなさまこんにちは。17年５月、秋田市大町に「アートスペース　ココラボラトリー」をオープンしました、代表の笹尾千草と申します。

◆ネーミングについて

「ココラボラトリー」というとすごく耳慣れない言葉で、よく買い物をして領収書を書いてもらうときにとても困るのですけれども、通称「ココラボ」といいます。どういう意味かというと、造語なんですけども、「ココラボラトリー」の「ココ」っていう字にたくさん意味がこめられていまして、まさに「ここ」、地域という意味と、個人個人の「個々」という意味、それと「コラボレーション」の接頭語「ＣＯ」に研究所という意味の「ラボラトリー」というのがついて、「ココラボラトリー」です。つまり個人個人が、それぞれの得意分野を存分に出し合